ゆくゆくはメイドの中から彼女がぁ！？

天倉 梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゆくゆくはメイドの中から彼女がぁ！？

【Ｎコード】
Ｎ６９１１Ｑ

【作者名】
天倉　梓

【あらすじ】
ただ、のんびり過ごして

親の帰りを待つだけのはずが・・・　　？は最新話です♪　読んで下さい！！

～序章～

～時代は２１世紀～

ここはとある国の巨大市場
ここでは全世界の名産品を取り扱い
様々な人や物が流れてゆく

そして、この市場を
管理、経営を任される青年が居た

彼の名は“天草　結城”（あまくさ　ゆうき）
出張に出た両親の代わりに
この超巨大貿易市場『テトラ』の
社長代理人を務める…はずだが…

結城は経営には関わらず
叔父の“三益　晃”（みます　あきら）に任せて

のんびりと暮らしていた
ある日、結城は趣味の市場見物に出掛けた

その日の夕刻…
結城の前にいかにも…いや…
完全に怪しい行商人が現れた

行商人は結城に囁いた
「面白い出来事は好きかい？」

「好きなら、どうするんだ？」と結城は聞いた

行商人は「なら、あなたにコレを…」と言い

赤い巾着袋を手渡した
怪しい袋を渡された結城は
「コレはなんなんだ？」と問いかけた

しかし、どこにも行商人の姿は無い

狐につままれた気分になったが

結城は家に帰ることにした

この日から、彼の生活は

１８０…いや…

５４０度は変わってしまった。

第1話　始マリ（前書き）

初めての作業で遅くなりました
（^__^；）

長くなってしまいましたが
読んでいただければ幸いです♪

悪い点があればコメントして下さい
今後に活かしたいと思います。

第1話　始マリ

結城は家の前まで来た

「やっぱり、無駄だよな…」とぼやいた

言葉では言い表せられない…

いや、言葉にするなら『絵に描いた豪邸』

無駄に広い庭

無駄に高い塔

無駄に多い部屋

無駄に多いトイレ

全てに無駄を付けたくなる、

この豪邸こそが、結城の自宅である。

「やっぱり、この家広すぎだろ…」

結城の言葉通り、事実であり
ほとんどの部屋が空いており
人が少ないのが欠点である…

～ロビー～

「ただいま～」
結城はゆっくりとドアを開けた

「おや、お帰りなさいませ、坊ちゃん。」
老執事の“久遠”（くどう）が結城を出迎えた

「すいません久遠さん、帰りが遅くて。」「いえいえ、夕食までに
戻って下されば
それでよろしいのですよ。」

久遠は結城を食堂に案内した

「そうだ久遠さん、晃さんは？」
結城は久遠に聞いた
「晃様なら、お先に寝ましたよ。」と
淡々とした、言葉で答えた

「まぁ、頑張ってますからね。」
結城は他人事のように答えた

「そうだ久遠さん、コレを見て下さいよ。」
「はて、コレは一体？」
結城は怪しい行商人と巾着袋の事を話した
「それで、行商人はどこかにきえたと…」
「えぇ、まるでオバケみたいに。」
「ご冗談は止して下さい…そういえばこの中身は一体？」
「あ、変な粉でしたよ…」

そう言うと結城は巾着の中身を見せた
「ふむ…確かに少々怪しげですね。」
と久遠は答えた
「気になるんで、後で調べますよ。」

「それは結構ですが、あまり夜更かしはしないでくださいよ。」

そんな事を話していたら食堂の前に着いていた

〜食堂〜

厨房から出てきた久遠は、
テーブルに料理を並べて

「では、ごゆっくりと。」
と言い一礼して久遠は出て行った

「あ、はい、分かりました。」
結城は1人だけの食堂で食事を取ることにした

数十分後

〜結城の自室〜

「いや〜食べた食べた♪あの人の料理は天下一品だな〜」
独り言を言いながら自室に入った結城は
本棚へと歩みを進めた…

「え～っと『薬草』『医療薬品』『危険植物』『秘薬』…これ位かな…。」
本のジャンルを呟きながら、本棚から該当する本を床へと落とす

「う～ん、ざっと見て２０冊強かな…朝までに情報が見つかればな…。
その前にこの粉についてまとめるか…。」
落とした本を見るが本を後にして、
粉の情報をまとめることにした。

１０分後

「粉の粒一つは滑らか、着色料は未使用で黒、水分に溶けやすく溶けても液体の色は変わらない、無味無臭…ますます分からないぞ……」
じっくり観察してみたが
まったくと言っていいほど進展は見られなかった

「か…は、ハクション！！」
不意にくしゃみをしてしまい
粉が宙を舞ってしまった

「あぁ～眼鏡に粉着いちゃったよ～…ガックシ。」
「まったく、最悪だよ…」

ブツブツと文句を言い眼鏡を拭く

結局、謎が謎を呼んでしまい、
余計に情報が混雑してしまった。

「仕方ない、ゆっくり探すか…」
そう言うと結城はベッドの近くに本を置き
眠る体制になりつつも、眼鏡を掛けて、
本を開いて読み始めた

「アヘン…これは違うか、ハーブ…これも違う、パセリ…もっと違うな。」

「コカイン…筍…椎茸……ｚｚＺ」

～結城の自室・朝～

「んぁ～…朝、か…」
結城は寝てしまっていた…
そして、朝の日差しと小鳥の鳴き声で目を覚ましたのだ

「ふぁ〜、起きますか…アレ？手が…」
結城の手は布団の中にある何かに潰されていた
「クソ、なんだこれ…って…柔らかい」
なにか柔らかい感触が手にあるのだ

「ほぉ〜なんか、良いね…」
「ひゃうん！！」
どこからともなく少女のような声が聞こえた
「な…なんかヤな予感しかしないけど…」
そう言うと結城は思いっきり布団を取った

「ん〜…んぇ？…おはようございます？」
中には自分より少し歳の低い女の子が良た
しかし、状況は最悪である…
結城の手はその少女の胸の所にあった
そしてその少女は“服を着ていなかったのだ”

「えっと…結城さん…ですか？」
「あ、ははは い！！」
突然の質問に結城は一瞬狼狽えるがすぐに切り返した

「そそ…その…服を。」
「服？…な／／／／…こ、この変態！！」
「グハッ！！…」

忠告した結城だが腹部に強烈な一撃を貰ってしまった…

「坊ちゃん、入りますよ」
部屋のドアがその言葉とともに開いた

「おや、これはお楽しみのようで♪」
「久遠さん、助け…」
部屋ではシーツを巻いた少女が結城の上に座っていた

「お嬢さんは誰です？」
「あ、私？…私は…誰だろう…」
「ふむ、記憶喪失ですかね…それとお嬢さん、服なら隣の部屋にありますよ。」
「ほんとですか！！」
「はい、ここを出て２２４と書いてある部屋にあります、後その部屋の鍵です。」
「あ、ありがとうございます！！」

少女と久遠の２人はやりとりを終えると久遠は部屋に入ってきて
少女はどこかへ駆けていった

「女には優しいんですね～」
結城は不満そうな顔をして言った

「えぇ、それが教えですから。
それにあの少女、危害は無さそうですし。」
久遠は皮肉たっぷりの笑顔を結城に向けた

「でも、一体何者なんだ…」
やはり結城は彼女が何者かが気になっていた

～２２４号室前～

（コンコン）
「着替えは済みましたか？。」
久遠はドアのノックと共に問いかけた

「あ、今終わったので、少し待って下さい」
するとほんの少しの間待つと少女が出てきた

「お待たせしました……あぁー！！さっきの変態！」
少女は出てきたと同時に結城を指差して叫んだ

「お前の方がよっぽど変態だろ…で、なんでメイド服を着てるんだ？」
と結城はため息混じりの返答をした

「うっさいわね！これしか無かったのよ！」
「まぁ、この部屋はメイド用の部屋ですから、後、借りたのですから働いてもらわないと。」

「えっ？」「はい？」
言葉を詰まらせた結城と少女に久遠は復唱した
「ですから、そこのお嬢さんには働いてもらいます。」

「えっ、き、聞いてないわよ！！」
「当然ですよ、言ってませんから。」
「ち、ちなみになにをさせる気？」
「坊ちゃんのメイドとして働いてもらいましょう。」

「ちょっと久遠さん、それはヤですよ！！」
「そうよ、なんでこんな変態の…」

久遠の提案に結城と少女は反論をした
が、しかし…

「そうですか～、では坊ちゃんが会社の資金を私的目的の為に使っていたことを大親方さまに御報告致しますね。」
「え、あ…その…すいませんでした。」

反論してきた結城に久遠は脅しを掛けて
刃向かえないようにした

「それと、お嬢さん『朝昼晩の食事』『寝床の確立』この条件ならどうです？」
「あ、えっと…『おやつと夜食』『お風呂付きの部屋』も追加出来ませんか？」
「働き次第で付け足しましょう。」
「は、働きます！！」

充実とした生活を遅れるなら働くしかない
と少女はそう思っていた…

「では、この話は終わりましたが…
お嬢さんのお名前が未だに分からないのですが…」
「確かに…お前もそろそろ思い出したろ？」
少女の名前を気になり始めた結城と久遠は聞くことにした

「愛音“あいね”、これしか分からないの…」
「どうして、それだけなんだ？」
「コレよ・・・」
そういうと愛音は小さいひびの入った眼鏡を見せた

「確かに愛音って書いてあるな…」
「坊ちゃん、そろそろ私は仕事があるので、失礼します。」
「すいません、頑張って下さい。」
久遠は本来の仕事を思い出し、そそくさと駆けていった

「えぇと、愛音だっけ？ちょっと俺の部屋に来い。」
「なに、今度は私を襲うつもり？」
「んなわけ、ねぇよ！良いから来い。」
愛音は結城を警戒しつつ彼の部屋へ向かった

～結城の自室～

「はいよ、コレ。」
「なに、眼鏡？」
「どっからどう見てもそうだよ。」
「うわっ、ちょっとキッツ～…」
結城が部屋に読んだ理由は愛音に眼鏡を渡すためだった

「でも、なんで私に眼鏡を渡すの？」
「お前少し目が悪いみたいだからな。」
「な…気づいたんだ…」
「まぁ…な。」

結城と愛音は愛音に合う眼鏡を探すため
2人で探していた

「全然、見つからないわね…」
「なにかが特殊なのか…う～ん」
「ほぉ～…ねぇ、この眼鏡似合う？」
「なんだよ・・・おい、その眼鏡返せ！」
ベッドの上に置いてあった眼鏡を愛音は
勝手に掛けたら結城に眼鏡を
取られそうになる

「ちょっと、なによ！」

「良いから返せっ…てわぁ！」
床にある本に結城は足を捕られて、
愛音を押し倒してしまった…

「あ、ご…ごめ・・・」
「大丈夫だけど…」
「・・・・・・」
「そそそそんな見ないでよ／／／／」
「可愛いな…」
「な、ばっバカ！／／／」
（バシーン！！）

ジッとした視線で見てくる結城に
なにを思ったのか愛音は結城に対して
強烈なビンタを喰らわせた

「あの、愛音…その眼鏡お前にやるよ…」
「え…は？」
「度も大丈夫みたいだし…それに似合ってるし。」
「う、うっさいわね！！最初から貰うつもりよ／／／／」
容姿を褒められた事に顔を赤らめながら
スゴく素っ気ない態度を愛音はとった

そして、結城はにこやかな笑顔をして
愛音に「これからよろしくな♪」と微笑みかけた

そんなこんなで2人は
広い屋敷の同居人として
暮らすことになった・・・

第1話　始マリ（後書き）

少し長くなりました・・・

ここまで読んでいただいた方
誠にありがとうございます　m（＿）m

第2話　オ疲レ（前書き）

いや～なんだか、遅くなりました（汗）
この所、急なトラブルで
ほぼ携帯を放置してました・・・

※舞台背景※

時代は２０世紀のとある夏
巨大市場の社長の息子“結城”と
記憶の無い眼鏡ッ娘“愛音”の
グダグダでヘトヘトの
萌えキュンなコメディ

第2話　オ疲レ

～天草邸内～

廊下には頬を真っ赤にした
結城の姿があった・・・

「最悪だ…いや…でもな……」
何かブツブツと呟く結城、その理由は
5分ほど前に遡る

～結城の自室～

「・・・ふぁ～」
いつものように朝を迎える結城大きな欠伸をして、体を起こし
いつものように着替えを始めていた

「昨日から、メイドが増えたけど、大丈夫か…」

昨日から、この屋敷に住むことになった
メイドの「愛音」、この少女は記憶喪失で
家族も居るかすらも未だに分かってはいない
自分と年も変わらない少女が1人…
同じ屋根の下のもとで暮らすとは…

結城も想像していなかっただろう、
だが、現に起きている出来事
なら否定する必要はない
そんな深々と考えていたら
着替えは済んでしまった

私服に着替え、部屋を出ようとしたが
部屋のソファーに、なにか変なモノがあった

「なんだこれ？」と口にして、よく見てみた

見たところ大きな布に
なにかが包まれているようだった
「出来れば、気にしたくない」と結城は思った

しかし、人間というのは
欲に勝つのは容易いことではない

結城の手は布を掴んでいた

だが、恐らくだが、結城の頭の中では
結果はもう見えていたのかもしれない…
最高であり、最悪の結果が…

結城は勢いよく、布の引っ張った

「この展開って、まさか…」
結城は布を取ったことを大きく後悔した
そうそこには「愛音」が居た…

それだけなら良かった
事態は最悪の状況「デジャヴ」っていた
愛音の格好は有り得なかった…

Yシャツ…だけだ…
そして、うっすらと見える下着…

もしも世の男性がこんな破廉恥な子を見たら、どうなるだろうか…

恐らく、獣と化すだろう
男とはこの様な状況には弱い生き物だ…

しかし、結城は違った
いや、違いすぎたのかもしれない

「おい、なんでここに居るんだ？」
結城はいきなり、寝ている愛音に話しかけてみた

すると、愛音は重たい目蓋を開けて

寝ぼけた顔で結城を見た…
「うぅ～？ん？おはよー…」

しかし、結城の先程の言葉は聞こえていないようだった
結城はもう一度、問いかけてみた
「なんでここに居る？」

「ふぁ～、久遠さんがこの部屋って……
え、えぇぇ！なんでアンタがここに！！」
愛音は結城の自室に居ることを驚いた

「あ…アンタ、見てんじゃ…ないわよ！」
愛音は自分の醜態をさらけ出していたことをヒドく怒り、結城に平手打ちを喰らわせた…

「いっつ～なにすんだ……よ」
叩かれた頬をさすりながら、愛音を見たが
そこにいたのは鬼の形相でソファーを持ち上げている、愛音だった…

「ま、待て…タンマー！」
結城は危険を察知して、急いで部屋から抜け出した

これが、結城が部屋の前に居た行程である

「ふぁ～、久遠さんがこの部屋って……

え、えぇぇ！なんでアンタがここに！！」
愛音は結城の自室に居ることを驚いた
「あ…アンタ、見てんじゃ…ないわよ！」
愛音は自分の醜態をさらけ出していたことをヒドく怒り、結城に平手打ちを喰らわせた…

「いっつ～なにすんだ……よ」
叩かれた頬をさすりながら、愛音を見たが
そこにいたのは鬼の形相でソファーを持ち上げている、愛音だった…

「ま、待て…タンマー！」
結城は危険を察知して、急いで部屋から抜け出した

これが、結城が部屋の前に居た行程である
「あぁーマジ最悪！！」
部屋の中から、涙を堪えたような声が聞こえてきた

それを聞いた結城はゆっくりとドアノブに手をかけて、扉を少し開けてみた
そこには、涙を目に貯めて
今にも泣き出しそうな愛音が居る

「だ、大丈夫か？」
結城は少し、困った表情をしながら
愛音の元へと近づいていった…

「う…う…」
「う、って？」

「バカ！バカ！」
バカと連呼しながらクッションで結城の頭を愛音は叩き続けた

「おや～これまた精が出ますね～」
扉のところから、執事の久遠がひょっこりと頭だけを出し、こちらを見ていた

それを見た愛音は
「あんたのせいでしょうが！！」と言い
クッションを投げつけた

「いえ～私は間違えてませんよ♪」
と満面の笑みで久遠は笑いかけた
愛音は一瞬、ポカンとして
「そんな訳ないじゃない」と言い張った

「ではこちらに来て下さい、坊ちゃんはそこに居て下さいね。」
「な、なんで！？」びっくりする結城、しかし久遠は有無を言わせず
「よろしいですね♪」と言った
なにか物凄い気迫を感じた結城は、「はい」としか言えなかった
久遠と愛音は廊下に出て扉を閉めた

そして久遠は話し始めた
「トリックと言いますか、真実を教えます。昨夜、あなたに渡した紙を見せて下さい。」
と言われたので愛音は紙を手渡した

「結城の部屋の右隣」そう紙には書いてあった

「間違っていないんですがね～」
と久遠は不思議そうに思って
「間違ってるわよ！だって、あっちにアイツの部屋って書いてあって…ぇ？」
愛音が指を指した扉には左の扉には【結城の部屋】と書いてある、
そして目の前の部屋にも【結城の部屋】
さらには右の部屋にも【結城の部屋】

「え…これって…」
完全に唖然とするの愛音
「坊ちゃんの部屋の入り口は3つありますから♪」
と久遠は笑顔で答えた

「じゃあ、私の部屋！どこ！？」
と愛音は激怒しながら言う
「お～い、俺は放置か…」
結城が部屋から出てきた
「あ～忘れてました♪」と
久遠は結城に笑顔を向けてきた

しかし、愛音の部屋はどこなのか
「ちょっと、私のどこよ！！」
愛音はまだ怒ったようすだった
「はいはい、こちらですよ…」
と久遠は少々疲れた感じで案内をした

だが、案内と言っても結城の部屋［右］を
さらに右に行っただけだった
「近っ！！」と結城と愛音はツッコミを入れ

驚きを隠せなかった

久遠は自然現象のようにその理由を言った
「当たり前です、愛音…アナタは坊ちゃんの専属のメイドなのですから♪」

「えええぇぇ！！！」「えええぇぇ！！！」
結城と愛音の絶叫が響き渡った

愛音は一気に反論をした
「ちょ…ちょっと待ってよ！なんで私がこんな変態珍獣天然危険物の隣の部屋なんかにぃ！！？。」

結城も反論を始めた
「そうだよ！、こんなセクハラ変態露出狂女の隣じゃ、おちおち寝れないね～。」

しかし、結城の言葉に愛音が反論した
「はぁ！？誰がセクハラ変態露出狂よ！、アンタの方がセクハラ野郎じゃない！人の胸触ったり、下着見たりした変態じゃないよ！」

結城も負けじと反論する
「うるせーよ！、最初のは不可抗力だろ！大体、真っ裸で居たお前も悪いだろ！、それにお前の下着見ても興奮しねーよ！」

「ぜってー、変えてくれ！」「絶ッ対に、イヤだから！」

と、結城と愛音は久遠に言ったつもりだが
そこには誰も居らずメモ用紙が一枚置いてあった

【仕事がありますから失礼、
愛音はこれから毎日、坊ちゃんの身の回りのお世話をする事、坊ちゃんの言いつけには従うこと（※注意※　卑猥な申し付けの場合は反撃を許す）

以上の事を踏まえて、
坊ちゃんは行動するように
愛音もあまり坊ちゃんを虐めないように
お二人が友好的な関係になるよう見守っています
それとお二方は自分の立場をお考え下さいね♪（＾＾　）】

シーンと静まる2人・・・

「とりあえず、愛音…着替えてこいよ…」
と結城は着替えを進め
愛音はそのまま無言で自室に入っていった

～5分後～

「服は可愛いのに、スースーするわね～」
ロリータファッションのような
可愛らしいメイド服を着た愛音が、
愚痴をこぼしながら部屋から出てきた

「おぉ、やっと出てきたか。」
そこには結城が座って待っていた
「なんで、アンタはそこに居るわけ？」
と愛音は不思議がって聞いた

「いや～仮にも、君のご主人様なワケだし、待つのは当然、みたいな？」
ふざけた顔をしながら結城は答えた

バカみたい、と今にも言いそうなた表情を結城に向け愛音はスタスタと歩いていった

「おいおい、ちょっと待てよ。」
結城は愛音の手を取り引き止めた

「なによ、一体・・・」
「雇用契約書♪」
「は？なんでそんなの…」
何故、契約書を出したのか愛音には良く分からないが、結城はどうも機嫌が良い

「ここにサインするだけで、良いからさ♪」
「分かったわよ…まったく」
渋々と愛音はサインを記入して
立ち去ろうとしたが…

「ちょっと待て、サインしたからには、契約内容に従って貰わないと♪」
結城は輝かしい笑顔を向けている

「契約内容ってなによ?、聞いてないわよ?」
まったく話を掴めていない愛音を見て
先程の契約書を見せた

書いてある項目は以下の通りだ

1. 片時も俺の近くに居る
2. 毎朝、起こしにくる
3. 身の回りの世話をする
4. 命令は絶対

「あぁ〜、私はこんなの従わないわよ。」

呆れ顔をして愛音はボソッと呟いた

「フッフッフ…甘いな…これを見ろ！！！」
結城は注意事項と書かれた部分を
押し付けるように見せてきた

【注意事項：以上の契約内容に従うことを遵守する】

「・・・は、アンタふざけてるの？」
「いや、至って冷静だが♪」
愛音は少し黙り…ゆっくりと話始めた

「仕方ないわね…守るわよ…名前、書いちゃったし・・・それとアンタの為じゃ…ないっ…」
「なんだ、そのツンデｒ」
「うっさい／／／…で、これからどうすんの…」
なんとも微笑ましい…いや、和める会話だ

「さ、じゃあ出掛けんぞ！」
といきなり結城が愛音の手を引き
強引に町へと駆り出して行った…

第2話　オ疲レ（後書き）

ここまで読んでいただき
ありがとうございますm（＿＿）m

毎度毎度、文学センス皆無な
お馬鹿な文章でごめんなさい　（泣）

次回からコメディ色を強くして
可愛らしい展開や破廉恥なな展開など
色々と書くつもりです…

あと、ご意見、ご感想
お待ちしております　m（＿＿）m

?第3話　オ友達（前書き）

凄く更新が遅れてしまい
申し訳ありません…
前の話が非常に短いので
今回はなんとか長めにしました…

?第3話　オ友達

～市場中央～

「ほぁ～…なんなの、これは…」
ぽっかりと口を開けて唖然とする愛音

「ここが巨大市場【テトラ】、この世界の４つの地域の食料品・日用品・工具・職業必需品など、様々なジャンルを取り扱う世界最大の交流市場さ！」
と説明口調で結城は話していた

「なにその説明口調、気持ち悪い…」
愛音はポツリと罵倒した

「なんて事を言ってるんだ、俺はお前のご主人様なんだぞ！！」

「イヤ～だって気持ち悪いですから、ご主人様♪」
端から見たらバカップルにしか見えない
やり取りをしながら、２人は奥へと進んだ…

～市場・裏～

「ねぇ、えぇっと…ご主人様？ここは何？」
愛音は頭に？マークを沢山浮かべて
結城に質問している

「何って、裏の市場だよ？まぁ俗に言う【闇市】ってところかな♪」

「ちょっと、そんな危険な場所に来て、良いわけ！？」
と愛音は闇市に行くことを止める

「なんで、そんなにイヤなんだよ？」
結城は不思議そうに聞いた

「だって、肩から鎖を掛けた人とか、全身傷だらけで怖い顔の人とか、変な冠して身長が高い大男とか…」

「そんな世紀末な人が居るわけないから！
とりあえず、早く行くぞ！」
と結城は強引に愛音の手を引いて、中に入っていった

「グスン…私の初めてが…」
すすり泣いている愛音

「おい、誤解を招くだろ！！」
と地味に怒る結城

「フン！なんかあったら責任取ってもらうから！」

「その言葉は、イケないフラグにしか、聞き取れないんだが…」
とりあえず、２人はゆっくりと歩きながら中を進む

「おぉ！御曹司じゃないですか！！」
肉厚な大男が話しかけてきた

「出たぁ！！オバケェェ！！！」
愛音はいきなり大声をあげ結城の後ろに隠れた

「愛音…この人は山木さん、俺の馴染みの店長だよ…」

「本当に大丈夫なの？如何にも前科２犯くらいありそうな見た目なんだけど…」

「んまぁ、大丈夫なんじゃないか？」
となんとか愛音を説得し山木にの元へ寄る

「イヤ～、御曹司が女の子連れて歩くなんて、天変地異でも起きそうですね♪」
と笑顔で山木は言った

「アハハ～やっぱりそう思う？それでさ、この店いくらで売れると思う？」

「じょ、冗談ですよ…御曹司…」
結城の強烈な切り返しに山木は思わずたじろいでしまった

「まぁ、それはそれとして…俺を呼び止めるって事は、なにか掘り出し物があるのかい？」

「流石は♪…実は最近、見世物小屋に人が集まるらしいんだが、なんでも美少女を見世物にしてるとか…ちなみにその子、雇われてるじゃなくて、完全に強いられてって話しなワケ。」
と山木は少々小難しい説明をした

「ふぅ～ん…」
結城は軽く相づちを打つと、踝を返して山木の店から離れていった

「ちょ…ちょっと！その子を助けましょうよ！」
と言う愛音の言葉を結城は無視して歩いている

「あ…あの、これで失礼します。」
素早く頭を下げて愛音は結城の下へ走った

「ちょっと、待ってよ！」

「とりあえず、例の小屋まで行くぞ。」
ようやく返事をした結城の言葉に、少し戸惑いながらも愛音は頷き、ついて行く

～見世物小屋～

「開演は深夜００時から０１時まで、って書いてあるな…」
結城は小屋の立て看板を見て、そのまま読み上げた

「００時といったら…今は１７時だからかなり時間があるわね…」
と懐中時計を見ながら、愛音は時刻を伝えた

「ん～…なら一度、戻るか。」
「それが良いんじゃない？」

「まぁ…とりあえず、話もしてこないとな～」
「話なんて、あるの？」

「ちょっち、色々とね♪」
「・・・？」

こうして２人は一度、屋敷に帰ることにした

～ロビー～

「うっし、愛音はもう休んで良いぞ…」
「ちょっと、何言ってんのよ！！」
いきなりの発言に愛音は激怒した

「だから、もう今日は寝ろ…」
「な、なんでよ！今夜は私も付き合うわよ！」

「おいおい、そんな急展開は望んでないぞ…」
「ば、バカ！！何バカかなこと…」

「ま、どちらにしろ、お前は家に居ろ…これは申し付けだ！」
夜中に行動を起こそうと考えている結城に対して、ついて行くと愛音は言ったが、家に居るように言われてしまった

「あぁ～はい分かりましたよ！頼んでも助けてやんないんだからね！！」
「はいはい、ツンデレだね可愛いぞ♪」
「バッカじゃないの！！…」
愛音は変な褒め方をされたので、そのまま怒って離れていった

～廊下～

「まったく、絶対に助けてやんない…ぜぇぇぇったいに！！…バカ…」

愚痴をこぼしながら、愛音は長い廊下を歩く

「退屈になっ・・・わっ！！」
愛音は足に何かが引っかかり転んでしまった

「おぉ～可愛い白黒の縞パンだね～♪」
「ちょっと！！誰よ一体…あれ？…メガネメガネ…」
転んだ拍子にパンツを見られて、何者かにその色を言われ、さらに転んでで愛音は眼鏡をどこかにやってしまった…

「はい、お嬢さんの眼鏡♪」
「えっ？」
すると、いきなりメガネを掛けられた…その目の前には美少年ともとれる、【色白の銀髪の青年】が居た

「大丈夫かい、お嬢さん♪」
「あ、ありが・・・はいぃぃぃ！！！！」
しかし、美少年なんて見た目だけだ、なんと男の手は愛音の胸に当てられていたのだ

「どこ触ってんのよ・・・このヘンタイ！！」愛音は力一杯に拳を握り、男の鳩尾目掛けてパンチを食らわせたのだ

「ちょ！がはぁ！！」
K．O．と言うべきか、男は愛音のパンチで後ろに少し撥ね飛ばされて、その場に倒れ込んだ

「おや、これは一体？」

するとそこにタイミング良く、久遠が現れた
「ちょっと、久遠！この変態生物は何なの？」
一気に詰め寄り、愛音は久遠を問い詰めた
「あ～、まだ話していませんでしたね…彼は此処の経理担当兼社長代行の【三益（みます）　晃（あきら）】です、それと坊ちゃんの義兄で…後、変態ですね。」
「ふぅ～ん…って…この変態が社長ぉぉ！！」
「なんというか…ここにメイドが居ない理由が彼だったりするので…」
「あぁ～納得♪」
愛音は晃のことを聞くことが出来たが、心の中には小さな傷が残った

「ハッハッハ！んまぁ良い感触だっ、がはっ！！」
「あ～き～ら～くん♪、なにが良い感触ですって～？」
すると、何かを言いかけた晃だが、その上には【栗色で長い髪のスレンダーでキッチリとスーツを着こなした女性】が、ハイヒールで晃の背中を踏んでいたのだ
ハイヒールで晃の背中を踏んでいたのだ
「ま、舞！なんで此処に！？」
「うっさい！この変態、そんなに私の胸じゃ物足りないか！えぇ！」
スレンダー、というのは誤りだった、ここでの適切な言葉は『凹凸の無い壁』なのだろう

「く…久遠、あの怒ってる人は…」
「彼女は【天草（あまくさ）　舞（まい）】坊ちゃんのお姉様です、それと晃様の妻です。」
「あの変態男、結婚してたの！！」
「政略結婚…とか、そんな深い意味は無いのですが…一概に舞様が惚れたのですが…あの有り様です。」
「なんだか、可哀想なお嫁さん…でも、なんで惚れたのかしら？」
「聞いた話によると、とある夏の夜…舞様が夜風に当たるため散歩をしていました、そこに突然の数人の男が！！…」
「まさか！そこで助けたとか？」
「いえ、舞様はその輩たちを一分も経たない内に、全員懲らしめたと…」
「どんだけ強いのよ！」
久遠の話す、舞の武勇伝…しかし、肝心な部分が抜けていたのだ
「ねぇ久遠、肝心の惚れた理由は？」
「聞いた話は此処までです、この後の出来事に秘密があるらしいのですが、全く口を割らないらしいです。」
「えぇ～！！」
駄々をこねる子供のように愛音は不満そうな顔をした
「ちょっと久遠さん？話は終わりまして？」
「えぇ、舞様も程々にしてくださいよ。」

「わかってるわよ、仮にもコレは旦那なんだから」
そう言うと舞は、気絶をしている晃の背中を踏みつけた

「ひぎゅぃ！！！」
踏まれた晃は声にならない声をあげた
だが、ピクリとも動く気配がない
舞は晃をおぶり、ゆっくりと歩いていった

～舞の自室～

晃はベッドに俯せで寝かされていた

「晃…ゴメンね、踏んづけたりして…」
舞は優しく呟きながら、自分が先ほど踏みつけていた場所に、シップを貼っていた

「まったく…手加減しろよ。」
「だからゴメンって…」

「んじゃ仕返しさせろ、手を貸して…」
「は、はい……痛っ！！」
晃は舞の手を取ると、手の甲をつねった

「それと、そこの君も入っておいで…」
晃は先程から気づいていたのか、廊下に居る何者かに対して出てくるよう言った

「ギクッ……バレちゃった～♪」
そう言って出て来たのは愛音だった、
テヘッっと愛音は言うと小さい拳で、頭を優しく叩くように拳を当てた

「あら、アナタはさっきの…」
「昨日からここに住み込みで働いている、愛音って言います！！」

「舞よ、よろしく。」
愛音と舞は、そう言うと軽く握手をした
「あ、俺は晃だ宜しく！」
晃は手を出して握手をしようとするが、愛音は手を出そうとはしない

「アナタみたいは変態セクハラ生物と、握手したくありません。」
満面とも取れる、最高の笑みを晃にぶつけた

「晃～言われたい放題ね♪」
舞もクスクスと笑い、晃を見る

「舞には言われたくないな、そんなぺったんのクセによ～、触っても良くないっての。」
「あ～き～らくん、誰が『貧乳まな板絶壁つるぺったん』ですってぇぇ！！」
晃の愛の無い言葉に舞は激怒し、怒りの炎に満ちた目で晃を睨んだ

「あぁ？言ってやる、ぺったんこ～ぺったんこ～」
「キイィィ！バカバカバカ！！」
他愛も無い痴話喧嘩が始まってしまった…
場の空気を察したのか、愛音はゆっくりと部屋から出て、自室へと戻っていた

「ふぅ～、羨ましいな～」
戻る途中、ふとそんな事を言ってみた、だがその言葉と共に結城の事を思い出した

「ばっバカじゃないの！あんなバカのどこが…もぉ！！」
愛音は顔を真っ赤にして、自室の壁を蹴った
すると、壁が小さく崩れだしたその壁にはうっすらとカラフルな模様が見えた

「何これ…」
そう言い、払うように壁に触ると、そこには絵が描かれていたのだ

「心理学的に考えますと、名前というのは名付け親の『夢』『希望』『願望』、このどれかが入るのです。」
今まで、愛音しか居なかった部屋に久遠が立っていた

「・・・・・・」
すると愛音は魂が抜けるかのように、気絶してしまったのだ

～数時間後～

「ん、んん～」
愛音が気づくとベッドの上に横になっていた

「気づかれましたか？」
久遠はこちらを見ていた

「久遠さん、その絵は一体…」
「これは坊ちゃんが幼少の頃に描かれた絵です。」

「でも、もう一人と一緒にですよね…」
愛音の指を指した先には、イニシャルと思しい英語があった

「Y．AとA．N…一人は分かるけど、もう一人は…」
「名前は【中津（なかつ）　愛美（あいみ）】、あなたと同じメイドで、この部屋を使っていた人物…」
愛音は驚愕した、まさか自分と似た名前、更に自室の前の人物とは、あまりに出来すぎている

「ちょっと久遠さん！変な冗談は止めて下さい！！」
怒るしかなかった、たとえ事実だとしても愛音は受け入れたくなかった

「では、黙って私のつまらない小話を聞いて下さい。」

「これはもう、何年も前の話です。

ある屋敷に、何不自由なく暮らす男の子が居ました、彼は毎日を自由に楽しむヤンチャな子でした。
しかし、彼は親愛情を受けられなかった、両親はいつも出張で世界の各所を回っていました、そんな彼は気持ちを隠すために、ただひたすらにハシャいで、一日も早く眠りにつきたかったのです。
そんなある日の事、その屋敷に小さな女の子がやって来ました、少女は屋敷の中庭で倒れており、使用人の一人がそれを見つけて、助けたとのこと。
少女は礼をしたいと言い、屋敷の手伝いを申し出たのです、そうして少女は【メイド見習い】として働くことになりました。
最初はぎこちない動きで、仕事を上手くはこなせず、皿を割らないのが精一杯でした、
ある日、一人の使用人が『彼の遊び相手』はどうかと提案したのです、少女は快くＯＫを出し、ですが…彼は少女とは遊ばず、一人で遊んでいるだけだった、少女は思い切って聞いた『何故、私と遊んでくれないの？』、すると彼は一言『つまらない』と言い、また一人遊びを始めました。」

久遠は淡々とした口調で話を続ける

「そんなある日のこと、彼はチョークで壁に絵を描いていた、少女は自分もチョークを取り、壁に絵を描き始めました。
彼は『どうして、ここに来る』と、彼から話し掛けてきたのだ、少女は『寂しそうだから』そう言って彼の方を向きました、彼は『ありがとう』と言い、また絵を描き始めました。
そうして２人は、その日以来から行動を共にするほどに仲良くなりました、それを聞いた使用人達は大いに喜んだと、
しかし悲劇と言うのは突然来ました。
ある日、使用人の手が足りないということで、
街への買い出しに、行くことになりました、

しかし、その日…少女は帰ってきませんでした、使用人達総出で街を探しましたが、結局見つかりませんでした、失踪から1ヶ月も経ち、誰もが忘れてしまっていました。
1人の使用人が少女の部屋へと足を運びました、部屋の壁に小さな落書きを見つけたのです、そこには2人の自画像がありました、それを見た使用人は絵が隠れるように、石灰のような物で隠したと…
それ以来、その部屋は誰も使っていません、
おしまい。」

久遠は話し終えると、フゥーッとして呼吸を整えた

「なんだか、悲しい話に聞こえるけど、まだまだ諦めなくて良いんじゃない？」
愛音は話を聞いた感想を述べたが
逆に久遠に質問をした

「そうですね、行方知れずなだけで、どこかで楽しく暮らしてるかもしれませんし…」
「そうそう、だから別に悪い考えにしなくても大丈夫でしょ♪」
愛音は明確な証拠も無いまま
事を決めつけるのはイヤだったのだろう
だから、久遠にはこう言ったのだろうか…

「それより久遠さん、今は何時ですか？」
「ちょうど、００時になった辺りですね。」

「こうしちゃいられない！私、ちょっと出掛けてきます！！」

愛音は自分が気絶してしまい、そのせいで大いに時間が進んでいることに気づくと、急いで部屋から飛び出した

「愛音、待ちなさい！…まったく。」
久遠の呼び止める声も虚しく、愛音の姿はもう見えなくなっていた

～市場・裏～

「いきなり出てきたけど、何も持ってこなかったわね…」
咄嗟に出て来たため、なんの準備も無しに愛音は来てしまった

「唯一、取ったのがコレね・・・なんとかなる…よね。」
そう言って愛音が手に持っているのは、真っ黒なコートだった

愛音は通行人の男性に見世物小屋の場所を尋ねた
「この時間のかい？それなら、あの路地を抜けた先の『朱(あか)の広場』でやっているよ。」
通行人は快く場所を教えてくれた

「でも、夜道は……」
「ありがとうございます。」
男性は何かを言っていたが、愛音は直ぐに移動してしまった

「あの人、何か言っていたけど…まいっか」
愛音は言葉をうっすらと聞こえていたが、気にせず小屋へと向かった

～朱の広場～

確かに小屋はあったが、なんとも『小さい小屋』であった

「案外、質素な小屋ね～…それじゃ早速。」
特徴になってしまいそうな眼鏡は外し
コートを羽織り、メイド服を見えないように、キッチリと着こなした

「じゃあ、行こうかしら…」
そして、愛音は小屋へと足を踏み入れた

奥の方の天井に照明があり、それが見世物だろう、中には数人の人影が見えていた、恐らく大人だ
「あの～すいませーん…」
しかし、愛音の問い掛けに人影は微動だにしない

「あのぅ？ちょっと…キャッ！！」
人影の顔を覗き込んだ愛音は、腰を抜かし尻餅を付いててしまった、人影は全てマネキンであった

「君は人形は好きかい？」
後ろから男の声が聞こえ、愛音は咄嗟に振り向いた
そこには、漆黒のスーツにシルクハットを被った男が居た、顔は暗く見えない…男は指を明かりの方に向けた
愛音はゆっくりと立ち、明かりの元へと向かった

「・・・・・・」
そこには綺麗なドレスを纏い、足枷をし、眠っているような顔をした、銀色の髪の少女が座っていた
愛音の存在に気づいたのか、少女はゆっくり目蓋を開けて、か細く喋った
「あな…た…は……」
少女の瞳は純血に染まったような真っ赤な瞳だった

「え…あ、は……」
声を出せない愛音、自分に何が起きているのか、それを整理することで手一杯なのだ
「……（この子は一体…生気を感じないというか“心”が無い感じ、それに後ろの男も一体…）」

「あなた…ダレ…ナニ…」
少女は立ち、愛音を見つめている
背丈や外見から察するに、愛音と年も変わらない、決定的な違いは“何か”が無いだけだ
「わ、私は…愛…愛音……」
まともに声を出せたが、それ以上の言葉が出ない、
「ユウキ…あなたの…」（ガシャン！！）
少女が話している途中、大きな音がした、音のした方向を見ると、そこには頭から灰色のローブした人が見えた

?第3話　オ友達（後書き）

なんか、良いとこで切っちゃいました
これも1つの作戦なのです↑
嘘です、ただの一区切りです♪
先に次回の予告をしますと
「物語とは表側と裏側の話があります♪」
まぁ、言葉をそのまま捉えるのです
これもまた、私なりの遊びなのですから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6911q/

ゆくゆくはメイドの中から彼女がぁ！？

2011年10月8日18時13分発行